

「茜色の空 哲人政治家・大平正芳の生涯」を3度読み終えて

「茜色の空」は、香川県三豊郡和田村の農家に生まれ、第68・9代総理大臣（1978年12月7日～1980年11月9日）を勤めた大平正芳の生い立ちから死去までを描いた伝記的小説である。著者は大平の知己の実業家（元セゾングループ代表 堤清二）であり、詩人、小説家でもある辻井喬である。辻井が大平について書いているのは、その人となり、思想、私生活、家族や親族、故郷への思い、そして戦後の日本社会の政治、政争、派閥抗争という現実面の立場や行動、そしてその時々感情や心理である。

この本に巡り合えたのは、若い時の教え子豊浜町出身の今井義久君のお陰である。5月の中頃ひょっこり訪ねて来て、文庫本の表紙を見せて、「この本は凄いのよ。先生も読まないかんぜ。読み終えたら直ぐ持って来るきに」とだけ言って、そそくさと帰った。

1週間ほどして持って来てくれた。表紙をまじまじと見た。背広にネクタイ、革靴姿の大平正芳が芝生の上にあぐらを組んで座っている。読み始めたら止まらない。自分の本だったら、気になる部分に赤線を引くのにと思いつつ、一気に読み終えた。何故かその時、6年程前に亡くなった、私が大のファンだったプロ野球の野村克也の顔が浮かんできた。「本を読んだら気になった部分に赤線を引き、もう2回読む。3回目は気に入った言葉をノートに書き写す」とおっしゃっていたのが脳裏に浮かんできた。



1週間位して、赤線の代わりに付箋を付けながらゆっくりと読んだ。そして3回目、付箋の部分に特に注意しながら読んだ。これ程熱心に読んだのは何年振りだろう。本当に久し振りだ。充実感に浸りつつ、小学校以来かも、よしっ、読書感想文を書こうと思い立った。

「茜色の空」は5章より成り立っている。先ずは第1章 生い立ちから終戦まで

大平の家は中規模の自作農だった。願いが叶って三豊中学校へ進学した。4年生になった時、腸チフスを患って死にかけたが一命を取り留めたものの成績が落ちた。頑張って海軍兵学校を受験し、学科はパスしたが、急性中耳炎を患って身体検査で落ちた。そんな時、父親の利吉が急死した。進学を諦めようと思った正芳に、高松市の近くに住むヨシ叔母が「高商（現香大経済学部）に行くなら、私の所から通えばいい、学費も助けるよ」と言ってくれたのである。突然進学の道が開けたのだ。

高商2年の時、^{しっせいろくまくえん}湿性肋膜炎で1年休学する羽目になった。それでも独学出来るのは英語だと、辞書を片手に原書を毎日欠かさず読み続けた。キリスト教に出会ったのもこの時期だった。病気をしても落ち込んだりしない強さ、これが凡人とは違う正芳の強さであった。

高商を卒業すると、知人を頼って大阪へ行き、^{ももたにじゅんてんかん}桃谷順天館で仕事を始めた。英語の勉強は続けていた。そこへ、母親が転んで、脚の骨を折り入院した、と叔母が知らせてきた。大阪から丸亀へ向かう屋島丸の船上で上級学校進学を決意した。

東京商科大学（現一橋大学）へ上位の成績で合格。坂出市の鎌田共済会と香川県育英会から学費を借りることができた。飛び立つような思いで東京に向かった。耳に響く^{わだち}轍の音を聞きながら、三豊中学に進学するようになった時、父親が^{きゅう}「^ふ笈^{きょうかん}を負^いいて郷^い関を出ず、学ならずんば死すとも帰らず」と言われたのを思い出していた。

高等文官試験に合格。大蔵次官であった^{つしまじゅいち}津島壽一を訪ねた。津島は大平の話聞き終わると、まっすぐに正芳を見て、「分かった。キミ、大蔵省へ来い」とはっきりと言った。下宿先の従兄の家に戻ると、母親宛に事の次第を書き綴り、「天にも昇る心地とはかような心地ではないかと愚考致し候」と結んだ。正芳は昭和11（1936）年4月10日大蔵省に入った。仙台税務監督局の間税部長をしている時に、彼に人生のひとつの転機が訪れた。大蔵省から

日本の植民地行政を司る興亜院の四つの連絡部の1つ張家口に赴任したことであった。大平の張家口体験は、岸信介とは逆の道筋をたどったようだ。岸は「満州国」を自分の作品と言い放ったが、それは日本から資本と技術を持ち込んで大地から資源を収奪することだった。一方大平は、住民の大半が明代末期の大飢饉の時に移ってきた漢民族の子孫であり、主な産物は小麦、雑穀などの農産物であることが分かってきた。だから住民の信頼を得るには、農産物の価格政策が重視されなければならないと考えた。そして、もっと大きな問題は、「軍人では統治は無理だ」、それを軍人に分からせることだった。この張家口での1年半の体験が、後の大平の思考の土台、仕事の流儀の根源になったのではないか。

張家口から帰国した大平を待っていたのは、文教行政上の課題として、高等工業学校、医学専門学校の新設と大日本育英会の設立という、国家百年の大計と正面から向き合う大問題であった。植木主計局長と協力して大日本育英会を立ち上げたことは絶賛に値する大仕事であった。

この頃、妻志げ子と「日本が敗けたらどうなるのでしょうか」、「困るけど、一時の辛抱だよ」と話し合ったりしている。

第2章 敗戦から、吉田内閣の池田勇人大蔵大臣の秘書官まで

昭和20（1945）年8月15日、大平の胸中は、戦争がようやく終わったという安心感だった。マッカーサ元帥が進駐。津島壽一が蔵相に復帰した。大平は再び秘書官となる。直後の8月29日、母サク死す。



正芳は気が付けば、4年以上帰郷していなかった。帰心矢の如し。豊浜駅には、前年ラバウルから復員した兄数光をはじめ、親類縁者が迎えに出て来ていた。正芳は照れた。

昭和23（1948）年10月15日第2次吉田内閣誕生。小学校3年生だったが壁新聞を作り、この記事を書いたのでよく憶えている。大蔵大臣池田

勇人、大平は秘書官となる。心構えは補佐官だった。従来以上に腰を低くして発言するようになり、「アー、ウー」の秘書官と言われるようになった。

北朝鮮軍の南下により朝鮮戦争が勃発した。日本の経済にとっては神風であった。マッカーサ元帥はシビリアンコントロールを逸脱し、トルーマン大統領は彼を罷免した。マッカーサ元帥は帰国した。小学校5・6年生であったがよく憶えている。

第3章 大平衆院選に打って出る

昭和27年は特別な年だった。池田大蔵大臣の強引な勧めで、衆院選に打って出た。大平42歳であった。実兄数光の懸命な運動のお陰で初当選した。私は東中学校1年、担任の矢野由夫先生の勧めで、友達4人で勝間小学校へ立会演説会を聞きに行った。その半年後、いわゆるバカヤロー解散などと呼ばれている選挙があった。吉田総理は、大平の応援に駆け付けてくれた。訂正を何度頼んでも、大平のことを「おおだいら君」と言うのを改めなかった。次点を数百票上回って辛うじて最下位当選を果たした。

第3章の圧巻は、岸内閣の安保反対のデモ隊が昭和35年6月15日夕方、雨の中を国会へなだれ込んだことだ。1人の死者が出た。東大生の^{かんば}樺美智子さんだ。岸総理は再三自衛隊の出動を言い、赤城防衛庁長官がそれを拒絶し通した。私は国会へなだれ込んだ1人であったのだ。4日後の6月19日の午前零時、新安保条約は自然成立し、岸首相は退陣を表明した。

これは有名な話だから省くわけにはいくまい。生産者米価をどう決めるかで、自民党の総務会がもめた時、農林族らしい若い議員が、「わが党が理解がないから、こんな低い米価をめぐって議論になる。大平政調会長などは大蔵省のエリート出身であり、農民の生活を知らないからこうした事態を招いたのだ。直ちに辞職して退陣せよ」とかかってきた。正芳は角栄の制止を払いのけ、「両総務は私に、大平は百姓の生活を知らないと言われたが、お見受けするところ、あなた方は裕福なお育ちのようだ。



それに比べれば私は讃岐の貧農の倅である。少年の頃から、夜明けと共に家を出て、山の中腹にある水の少ない水田を見廻った後、朝一番の汽車で通学するのが日常であった。・・・・」と睨みつけた。この正芳の発言で総会の空気は変わり、米価の扱いは党三役と米価調査会長に一任と決まった。

第4章 命懸けだった日中国交回復

昭和47（1972）年7月7日佐藤栄作退陣、三角大福（三木、田中、大平、福田）の争いになった。予想外の田中角栄の勝利に世間は沸いた。田中内閣の誕生である。大平は外務大臣となる。田中が大平を引き付けたのは、彼の天性の明るさ、その無邪気な性格であった。一方、大平が田中を引き付けたのは、大学出の秀才らしくないまっすぐなところだった。

田中内閣の最初の仕事は、中国との国交の回復であった。北京へ行く前の晩大平は、「今度の仕事は失敗すれば勿論、成功しても危険だ。お国のために、という考えだけで行ってくるが、どんなことがあってもうろたえないように頼む」と妻志げ子に言った。

日中交渉が成功したとしてもう1つの問題は、日本が台湾の国民政府との間に結んだ日華平和条約をいつどう解消するかであった。それをとても心配していた周恩来に、大平はその場で、「私を信用して任せてほしい」と言い切った。調印式の直ぐ後に大平外相の記者会見が開かれた。その席上、「この調印の結果として、日華条約はその意義を失い、同条約は終了したというのが、日本政府の見解であります」と言い切った。その言葉を聞いた周恩来は、心を許している側近に、「大平は誠実で嘘を言わない。博学で頭の回転が速く、我が国のことを理解しようとする姿勢がある」と褒めた。

第5章 大平内閣反主流派との40日抗争、解散総選挙その初日に倒れる

昭和53（1978）年、12月7日、68歳で首班に指名された大平は、政権維持に汲々として政策を曲げたり、人気取りに走ったりするようなことは決してしない、と自分に言い聞かせた。

総理になって初めて帰郷した。兄数光は３年前に亡くなっていた。香川県全域に亘る演説会場には、「歓迎大平総理」のアドバルーンが掲げられ、沿道に集まった大勢の人々が、日の丸の小旗を振って、「万歳万歳」と歓声を上げた。



後に「４０日抗争」と言われるようになった争いの結果として、第２次大平内閣が、昭和５４（１９７９）年１１月９日誕生した。灘尾議長の勧告を福田は聞き入れず、結局首班指名選挙に自民党から大平、福田の２人が立候補し、本会議の投票で決着を付けることになったのである。

三木元首相、福田前首相を中心とした反主流派との戦いはなおも続いた。会期末ぎりぎり、社会党が大平の内閣不信任案を出した。あろうことか、三木派、福田派は欠席。賛成２４２、反対１８７で可決された。本会議終了直後に閣議が開かれた。吉田茂、池田勇人を師と仰ぐ大平の腹は決まっていた。１番年長の法務大臣倉石忠雄が「総理にお任せします」と沈んだ声で言った。自治大臣後藤田正晴は「解散を前提に総理に一任します」と憤りを押さえた口ぶりで言った。

かねて６月２９日に予定されていた参議院選挙を繰り上げ、史上初めての衆参同日選挙を決めた。選挙は６月３０日から始まった。大平は初日に体調を崩して入院した。「付き添いの態勢をどうしようか」と娘の芳子が言った時、それまで沈黙を守っていた山村由美が言った。

「よろしければ私がさせていただきます。私、医師資格を持っています。医学部を出ていますし、身軽ですから」

複雑な家庭で両親の愛情を知らずに育ち、インターンが終わって、大平事務所へ勤めるようになった彼女にとって、正芳は恋人に近い父親であったのだ。

大平首相の急死は、生命を賭けて政策を実施しようとした指導者がいたのだという印象を人々に与えて、自民党の歴史的な勝利を呼び込んだ。選挙区の方は、森田秘書官が立候補し、運動らしい運動する時間はなかったが、当選することができた。「あなたどうする？森田の秘書になる道もあるけど・・・」と森田芳子に聞かれた時、由美は、「もう少し考えさせてください。それより1つお願いがあるんですけど、一度先生が育った観音寺とか豊浜に行ってみたいんです。先生が登った山に登って、そこからひうちなだ燧灘の海を見てみたいんです。夕日が沈む時の茜の空を・・・」と正芳の話の思い出しながら、芳子にお願いしたのだった。



最後に、どうしても書いておかねばならないことがある。北京外国語大学のキャンパスの一角にある北京日本学研究センターの図書室の入口には、ガラスケースの展示コーナーがある。そこに、大平正芳総理大臣の写真と遺品が展示されている。日中両国政府の合作で作られたこのセンターの前身は、通称「大平学校」と呼ばれた日本語研修センターだった。日本の外務大臣、総理大臣を歴任した大平正芳のきもい肝煎りで作られたからだ。

(令和8年7月1日)